

「ことば」に迫る社会学

社会学部長 中野敏子

松島先生のご退任にあたり、先生の専門領域から示唆を受けたこと、いくつかのエピソードを紹介させていただき、感謝の言葉に代えさせていただきます。

「詩」と「文学」を通じた社会への接近

今更ながらではあるが、先生の社会学を学ばせていただいたこうと、近著を読ませていただいた。『詩と文学の社会学』（学文社 二〇〇六年）である。本書は先生の「文学社会学」への思いが凝縮されたものといえる。社会学はあらゆる社会現象を学問対象として、飽くなき追究を続けている学問である。そうした社会学が文学をも社会学の対象とするその現実の一端に触れることができた。その領域に踏み込んでこられたことを改めて学ばせていただいた。吉本隆明の文学論を援用しながら、「沖繩文学」を読み解くことを素材に、文学を横軸「集合表象」と縦軸「内臓感覚」によって織り創造されるものととらえ解読するという方法論を提示しておられる（一頁）。文学が単なる読み物以上の「織物」であることが伝わってくる。さらに、頁を繰っていくと、井上陽水はじめ高度経済

成長期を彩る「ことば」をあや織る人びとが登場してくる。分析を読んでいくと、何の気なしに耳にしていた文脈のない陽水の歌詞にも「社会」が見えてくると納得する。それにしても、松島先生の「ことば」への眼差しは熱さを再認識させてもらったし、「ことば」とはなんとオドロオドロシイものかと思う。自分の関心としてある社会福祉の領域にある生活にみるオドロオドロシさもこのオドロオドロシサと相通じるものなのか。

「わが国の高度成長は何だったのか。あるいはわが国に何をもたらしたのか。」「高度成長の申し子達の表現世界から何を読み取れるか」(一九一頁)と述べておられる。社会学部という多様な探索の手立てを持つ人びとの集団に所属することで、こんな接近のし方もあると発見することができる。

「ファンタジー」と研究所

松島先生とは研究所所員として、また学内学会担当としていろいろご一緒させていただく機会があった。相談部の研究所所員であったとき、社会学と社会福祉学の複合的視点から相談ケースを分析するという企画があった。かつて所属しておられた臨床心理士Sさんと松島先生、そして私とで対談のようなものであったと記憶している。そこでどのような結末に至ったかはいまや定かではないが、松島先生が盛んに「ファンタジー」というタームを連発しておられたことだけ記憶している。そして、相談事例分析をこういう見方で語れるのかと驚いたと同時に「参加力量欠如」を自覚した。今思うと、「文学社会学」という領域の知見があったら楽しく参加できたかもしれないが。

「絵手紙のすすめ」

松島先生から、いつからか記憶にないが「使ってみてください。」とはがきに書かれたモダンな絵、絵はがきをいただくようになった。共同研究室にもちよこんと飾つてある。ちよつとした連絡用に随分使わせていただいた。「やってみませんか」と研究室で開いておられた絵手紙教室に誘っていただいたこともあった。参加する機会はなかったが、作品を楽しませていただけた。社会学・社会福祉学会誌『Socially』の表紙へは力作掲載で貢献してくださっている。

最後に、お疲れ様でした

定年まで働き続けることを成就される松島先生に、心より拍手を送りたい。そして、学生部長として、学内学会の継続と発展のため、学部教育の充実にと、これまで学部へ注いでくださいましたお力に感謝申しあげたい。これらからの「文学」と社会学との出会いの旅が益々楽しいものとなりますよう。